

はじめに

2009年に刊行された『教育と保育のための発達診断』は23刷を重ねるロングセラーとなりました。この本をテキストに多くの方たちと学習・研修をすすめるなかで全面改訂に着手し、上下2巻本として発刊することになりました。「発達診断の視点と方法」と題した下巻は2年前に発刊され、すでに多くの方が手にとってくださっています。そして今回、上巻「発達診断の基礎理論」を発刊する運びとなりました。

本巻は5部からなります。

「Ⅰ 子ども・障害のある人たちの権利と発達保障」では、発達理解、発達診断はなぜ必要なのかを国際的な権利保障の歴史と現状から述べています。

「Ⅱ 発達理論と教育・保育の実践」では、本書が依拠している「可逆操作の高次化における階層—段階理論」の全体像と、この発達理論が教育・保育実践とどのように結びつくのかを総論的に述べています。次頁にある発達段階図とあわせてお読みください。

「Ⅲ 発達の質的転換期とはなにか——その発見と実践研究」では、発達の質的転換期に焦点をあて、各質的転換期がどのように発見されてきたのか、発達保障の黎明期における近江学園、びわこ学園、乳幼児健診、保育園での障害児保育等での実践からひもといています。

「Ⅳ 障害と発達診断」は、自閉スペクトラム症と重症児をとりあげ、発達診断で重視したいことを述べています。

さらに「Ⅴ ライフサイクルと発達診断の役割」では、就学前、学齢期、成人期の各ライフステージにおいて発達診断がどのような役割を果たしているのか、子ども・なかま本人にとってはもちろん、家族や学校、地域にとっての意